

蜘蛛仙人は不意に現れた 池田博明

1991年の早春のことである。東京蜘蛛談話会の通信を担当していた私のもとに一通の原稿が届いた。それが下記の原稿である。文章のタイトルが奇抜であったし、内容もそれまでの一般的な通信原稿を逸脱していた。著者はまったく未知の人であった。奇人が不意に現れたと感じたが、原稿はそのまま談話会通信 No.72 に掲載した。その後、八幡さんのウェブに「創作 SF」としてアップされた。いま読み返してみると、これはファンタジーや SF ではなく、八幡さんの実践計画書であったのだ(2014年6月2日)。< >は編集者の追記。

八幡明彦 「蜘蛛の惑星」あるいは「アラクノトピア」

(1991年4月)

談話会通信にて映画『アラクノフォビア』への American Arachnological Society 前会長の抗議の記事(中日新聞, 1990.10.30)を見ました。古くは日本書紀・風土記に始まり、古今東西のホラー映画に登場する大蜘蛛・蜘蛛男爵へと続くアラクノフォビア(蜘蛛嫌悪症)の典型でしょう。Delena sp.(アシダカグモ科, Main, 1975)が猛毒を持つ「兵隊グモ」として登場するという設定(岡山徹 1990)の不当さはさておき、どうせ蜘蛛を取り上げるなら、ヒトを襲う毒蜘蛛などという単純な設定でなく、多様な蜘蛛類の生態に着目したら良さそうなものです。

私は生まれつきの蜘蛛愛好家で、幼い頃から山道を歩くときは網を壊してしまわぬように注意して歩いたものです。先日はビデオで 1977 年米国映画「The Kingdom of the Spiders」(Kantor & Sneller 製作)というのを見たのですが、5cm から 15cm 位の種々のオオツチグモ(生きた実物)が大量に「エキストラ」(?)として登場。残虐な人間たちによって片っ端から踏み潰されていく場面には、思わず「やめてくれ!」と叫んだものです。horror movie といいますが、動員された蜘蛛にとってこそ horrible な映画作りです。

私は不思議な蜘蛛の夢をよく見ます。その断片をもとに、アラクノフォビストへのささやかな「逆襲」として、また犠牲となったであろう蜘蛛の出演者への哀悼の意を込めて、こんなファンタジー物語を書いてみました。

時は 199X 年、品種改良から遺伝子操作にいたる人類の生物界への不当介入は「しっぺがえし」に直面していた。百年以上にわたって人工的交配と人工飼料によって大自然から切り放され、「飼い慣らされて」きた家畜たちは、ある日突然、人間に対して致命的な有害成分を持つ新世代を産み始めた。遺伝子操作による毒性産出遺伝子除去のため研究がなされたが、ウシ、ブタ、ニワトリへの恐怖心が一旦広まると、もはや伝統的な食肉産業の村立は不可能となった。食肉産業は一大転換を迫られ、野鳥、野生小動物が大量に捕獲される

事態となった。様々な料理法を駆使して、スズメやカエル、ネズミ、トカゲなどが食卓にのせられた。無論、多国籍企業化した食肉産業は、南側諸国の野生獣を入手し、従来のウシ、ブタ（というよりイノシシ）類の味覚をも確保する戦略をとった。北側諸国の環境保護運動は、肉食を断念できない者たちが脱落して退潮したが、逆に南側諸国では経済侵略反対の民族解放運動と結びつき、巨大なうねりをつくっていった。米ソ・EC・日本連合「多国籍軍」の戦略拠点とは、石油産出国以上に食肉産出国となった。

一方、北側諸国における「食用」野生小動物の乱獲は、生態系に深刻な影響を見せ始めた。上位捕食者の除去による下位捕食者個体群の膨張、すなわち肉食節足動物とくに真生クモ類の爆発的増大であった（Top predator の除去による蜘蛛群集の高密度化については Schoener & Toft 1983）。

物語は、蜘蛛を主要な Top predator とする生態系の成立に直面して、これを保護しつつ、人類の生態破壊的な文明を転換しようと努力する者たちと、Arachnophobia <クモ嫌悪症> に立ち、蜘蛛の絶滅をはかろうとする者たちとの間の攻防をめぐって展開する。

蜘蛛生態系の保護運動の最先端に立ったのは、日本蜘蛛学会・東京蜘蛛談話会などに所属する蜘蛛学者を中心とする「蜘蛛による害虫防除」に長年の研究・実践を重ねてきた人々である。ササグモによるスギ林の保護（萱島泉 1961）、水田の蜘蛛群集保護（小林四郎 1975）等を端緒とする研究は、90年代に入って中国蜘蛛学会（宋大祥 1987 など）との協力を深め、今や蜘蛛学のみならず農学の一大分野を成すに至った。日本の各地では「農産物輸入解放政策」に抵抗し続ける農村が「蜘蛛農法」を取り入れて無農薬・無肥料生産を行っている。化学肥料・農薬を用いた田畑に比して、圧倒的に蜘蛛・昆虫・土壌生態系の豊かなこれらの農地は、ついに無肥料生産をも可能にしたのである。これらの農村では蜘蛛の増加は喜びをもって受け入れられた。田畑を覆うコクサグモ属の「妖精のスカーフ」や電線にビッシリとついたジョロウグモの巣も村では「ありがたいもの」と受け止められる。

「夜蜘蛛は親に似ていても殺せ」という古い言い伝えはすたれ、家蜘蛛は「家の守り神」として大切にするようにと口々にささやかれるようになる。人々は、アシダカグモがゴキブリをとり、オオヒメグモが毒虫を吊り上げ（大利昌久 1975）、辺りを徘徊するハエトリグモや戸口・窓に幾重にも張られた円網が蚊やハエを取る場面に顔をほころばせる。子供たちの中には、ファミコンよりもエキサイティングなゲームとして「蜘蛛合戦」が復活する。ネコハエトリ、コガネグモなど伝統的な力士（斎藤慎一郎 1984）に加え、センショウグモ科の壮絶な戦い（Jackson & Whitehouse 1985）が人気の的となった。子供らは野山を駆け回り生き生きした目で蜘蛛を大事に育てた。何れの輸入業者によってか *Portia* 属 <ケアシハエトリグモ属>（Jackson & Hallas 1986）が日本に紹介されると、蜘蛛食いの蜘蛛をめぐる子供らの遊びはさらに熱狂的なものになった。いくつかの外国種は、日本に移入し野山に急速に広がる。

大人たちは、天皇制文化のもとで不当に扱われてきた「土蜘蛛」(沢史生 1990 など) を復権させた。古代各地で割拠した「土蜘蛛」とは天皇王権の支配にまつろわぬ在地の軍事勢力で、多くの場合指導者は女性として『風土記』に登場している(例えば大山田女、狭山田女、海松檜媛、八十女、速来津姫、浮穴沫媛が『肥前国風土記』に、神衣媛、阿邪爾那媛が『風土記逸文陸奥国』に登場)。 「地方の時代」の掛け声のもと全国各地でこれら土蜘蛛をたたえる祭りがおこなわれるようになる。

一方、東京を始めとして大都市では、従来からの蜘蛛嫌いたちが米製映画「アラクノフォビア」(S. スピルバーグと S. マーシャル監督) の上映運動などを機に、周辺の農村からの蜘蛛群集の侵入を阻もうと必死である。政府は、地球環境保全のための国連条約に従って停止していた殺虫剤大量散布を検討し、また同じく条約で禁じられている不妊個体の大量放出による種絶滅措置をも検討し始める。都市生態系へ侵入し始めた蜘蛛群集は、エサ不足から、農村における群集ほどの成長を示すとは考えられない。しかし、それでもエアコンの通気口をふさぎ、下水道内から大量発生して路上を徘徊し、あるいは至る所に遊糸を降らし、網を張って「景観を損ねる」のだ。

決定的な事件は、新潟県柏崎・刈羽原子力発電所で起こる。蜘蛛の網が電話線に通信障害を与えることは指摘されてきたが(小野武比古 1956)、蜘蛛農法を採用する地域住民の圧倒的な反対運動によって NTT、電力会社も網の除去作業をほとんど行えずにいた。それだけに電力会社は「蜘蛛による電力の喪失」を声高に叫んできたが、ついに蜘蛛によって原発が停止する事態が生じた。原発建物内に侵入した大量の微小な蜘蛛(0.1 ~ 1mm) がコンピュータ機内部に糸を引き回して計器をストップさせたのだ。

警察は、新潟県中頸城郡大潟町蜘蛛池を根拠とする過激派セクト「アラクノマニア」による制御室への幼蛛もちこみではないかと推測した。しかし環境中に激増する遊糸に加え、外国より移入したとみられる極小種(Archaeidae < 蜘蛛食いのアゴダチグモ科、テロ組織アルカイダと音が類似しているが語源は別 >) の局地的繁殖も観察され、「放射能垂れ流しが生んだ突然変異種の逆襲」とさえささやかかれて、真相は不明。偶然にしても、蜘蛛生態系による現代文明の制圧を予言するようなショッキングな事件であり、アラクノフォビストには戦慄を与え、蜘蛛生態系保護論者には神秘的な確信さえ与える一大転機となる。

蜘蛛生態系による現代文明の制圧は、世界的に進行した。というのは、南側諸国への資源食料収奪を強化する北側諸国が、熱帯の蜘蛛の共和国へ踏み込み、ついにその「聖域」を犯し始めて、「逆襲」に出会うからである。

野生動物の捕獲と熱帯林の伐採は「最後の秘境」にまで及んだ。そこには世界の蜘蛛学者さえまだ接したことのない、巨大な蜘蛛の共和国があった。クサグモ属、アシプトヒメ

グモ属の社会性種と *Eriophora* , *Metepeira* の円網のネットワーク (Fowler & Diehl 1978, Uetz & Cangialosi 1986) が共存して重層的に形成する巨大な蜘蛛の網が、種々の食肉性昆虫・蜘蛛を含んで生態系として成立しているのだ。しかも、その網のさらに周縁には Gasteracanthidae <トゲグモ類> の様々な形の鋭利なトゲを備えた種 (例えば谷川明男 1985) が、天然の「鉄条網」をはりめぐらしている。現地住民はもちろん、獣たちが近づくことを避ける「白い聖域」である。

現地住民の制止を聞かず、ブルドーザーでその聖域に踏み込んだ商社の人間たちは、驚くべき蜘蛛の社会生活を目の当たりにする。異種にまたがる重層的な共同狩猟・捕食行動である。巣にとびかかった獵犬は、彼らの目の前で網に足を取られて、地中生活をするジョウゴグモ科の有毒大型種に噛み倒された後、共同網から出てきた大きめの蜘蛛たちによってラッピングされ、さらに多くの小型種の群がるところとなったのである。

巣の中樞に危害を加えればヒトであっても捕獲してしまうであろう「蜘蛛共和国」を、現地住民は神聖視している。南側諸国は、これらの生態系を防衛することが即ち北側諸国の侵略を阻むことであると位置づけ、蜘蛛学者の協力を得て国じゅうに「蜘蛛共和国」の網を広げる計画を始める。昔から西アフリカでは、「蜘蛛がこの世界に知恵をもたらした」と伝えられている (Arkhurst 1964, 中山淳子 1977)。世界に食物・水・火をもたらしてトウレ (Evans-Pritchard 1967)、大地と万物を織機で織り出したムバ (山口昌男 1971)、天神の物語を手に入れ (Radin 1952)、さらにはハイチの大統領に抵抗するアナンシ (Courlander 1960) まで、蜘蛛は知恵にたけた文化英雄だったのだ (山口昌男 1971)。その伝統が再び想起され、森林と共存し、生態系を傷つけないように (網を壊さないように) 慎重に生きるヒト共同体の知恵が南側諸国のなかに急速に広がり、「北」に対抗する理念となっていく。

二十 X 世紀。現代文明最後のあがきで石油・原発依存を続け、滅び去ったいくつかの愚かな国のおかげで、地球全体の気候は熱帯化した。現代文明が生態系への譲歩を余儀なくされた国々では、森林破壊に歯止めがかかり、森は回復しつつあった。生き残ったヒト共同体はもう国家という愚かなイガミ合いの枠組を捨てて、「蜘蛛の糸」で互いに結ばれる地球生態系の一部として、「網を壊さぬよう慎重に」暮す共生生物の一種へと、新たな進化の一步を踏み出したのだ。「支配と階級を排した」「動物界で稀にみる平等主義社会」(Darchen & Delage-Darchen 1986) をもつ社会性蜘蛛に倣って、ヒト社会も平等な共同体をめざし始める。かくして地球は二十世紀の危機をかううじて回避し、「蜘蛛の惑星」として復活への道を歩み出す。

めでたし、めでたし。

< ウェブ転載時に付加された補注 >

補注 1: この物語を書いたのは、英国の狂牛病や香港の禽流感(バード フルー)の事件より、以前である。香港の 1997 年クリスマスは、120 万匹の食用の鳥たちの大虐殺で血に染まった。自然の「しっぺ返し」が事実にならないことを祈るのみだ。

補注 2: 柏崎刈羽原発は、東京電力が世界最大と自慢する原発基地だが、まだ世界のどこにも商用として使われていない「改良型沸騰水炉」を採用した柏崎原発 6 号機ほかの、事故はあとを絶たない。地元自治体は大規模放射能もれに備え、10 キロ以内の住民に対し、世界でも稀に見るヨウ素剤の配布を実施しているとか。

参考文献

- Arkurst, 1964. "The Adventure of the Spider" (訳)アーカースト『くものぼうけん』1968 福音館書店
- Courlander, Harold, 1960. "The Drum and Hoe. Life and Lore of the Hatian People". Berkley: 174.
- Darchen, R. & Delage-Darchen, B. 1986. Societies of spiders compared to the societies of insects. *J.Arachnology*, 14:227-238.
- Evans-Pritchard, E.E. 1967. "The Zende Trickster". London: 30.
- Fowler, H.G. & Diehl, J. 1978. Biology of a Paraguayan colonial orb-weaver *Eriophora*. *Bull.Brit.Arachnol.Soc*, 4: 241.
- Jackson, R.R. & Hallas, 1986. Comparative biology of *Portia africana*, *P.albimana*, *P.fimbriata*, *P.labiata* and *P.shultzi*, araneophagic, web-building jumping spiders : utilization of webs, predatory versatility and intraspecific interactions. *New Zealand J. of Zoology*, 13 : 279-303.
- Jackson, R.R. & Whitehouse, M.E.A. 1986. The biology of New Zealand and Queensland pirate spiders, aggressive mimicry, araneophagy and prey specialization. *J. Zool.Lond. (A)*, 210: 279-303.
- 萱島泉, 1961. 森林害虫の天敵としての蜘蛛の研究. 宮崎県立高鍋農業高校.
- 小林四郎, 1975. The effect of *Drosophila* release on the spider population *Appl.Entmol.Zool.*, 10: 268-274.
- Main, B.Y. 1976. Huntsmen of the bush from "Australian Spiders". Sydney. 85-98.
- 中山淳子, 1977. 『世界の民話 7』ぎょうせい, 335
- 岡山徹, 1990. 『アラクノフォビア』光文社. 243
- 小野武比古, 1956. 蜘蛛の電話妨害について. *Atypus*, (10): 9.
- 大利昌久, 1975. 衛生害虫の天敵としてのクモ類の研究 3 オオヒメグモの生態. *衛生動物*, 26(1): 15-19.
- Radin, P(ed.). 1952. African Folktales and Sculpture. Bollingen Series XXXII. :25-27.
- 斎藤慎一郎, 1984. 『クモ合戦の文化史』大日本図書.

沢史生，1990. 『鬼の日本史』彩流社．267.

Schoener, T.W. & Toft, C.A. 1983. Spider populations: extraordinary high densities on islands without top predators. *Science*, 219: 1353-1355.

宋大祥，1987. 『中国農区蜘蛛』，35-44.

谷川明男，1985. マレーシアの真正蜘蛛類 . 『マレーシア海外研修報告書』神奈川県高等学校教科研究会理科部会 . 44-45.

Uetz, G.W. & Cangialosi, K.R. 1986. Genetic differences in social behavior and spacing in populations of *Metepeira spinipes*, a communal territorial orbweaver. *J.Arachnol.*, 14: 159-173.

山口昌男，1971. 『アフリカの神話的世界』. 岩波書店 . 21 ほか .

土蜘蛛・みるかし姫のページ

「クモニスト・インターナショナル= 蜘蛛の惑星 = 」 開設の動機について Q&A

質問者（日経ゼロワンのライターI.S）

質問（1）このホームページの狙いは？ 何を読者に伝えたいのか？

答え「こよなく蜘蛛を愛する人と、クモに関心を持ちはじめた人に捧げる」とページのはじめにあるように、クモへの興味を少しだけ持っている人がもっと関心を深め、既にクモ好きな人はさらにこの世界にからめとられてしまうように、との思いを込めて、でも、結局はこの生き物を愛してやまない自分の道楽のために、始めました。

クモは、神秘的な生物で、飼ってみなくても、自然界で見るときにちょっと注意してみると、いろいろ驚くべき発見があります。世界中・自然界じゅうに視野を広げれば、そのかたち、生き様、名前も興味深く、さらには人間との関わりも、農業、文化、神話、映画、ペット、などなど、広がりはいきません。日本古代史に登場する「土蜘蛛」や、それを物語・演劇化した能・歌舞伎もとあげたのは、一つの生き物を、先入観で判断せず、色んな角度から見れば、「こわさ」の背景にある文化（人間の関わりかた）も見えてくる、と思うからです。

クモというと、写真を見るだけで、「生理的」に、ぞっとする人もいるでしょうけど、少し勇気を出して、読みすすんでもらうと、ちょっとイメージが変わるかも。

質問（2）ホームページを制作したいいきさつと時期は？

答え「香港に滞在することになった一昨年からはPC通信を始めて、アラクニッズ（クモ形類の生物学的総称）メーリングリストとアラクノロジー（クモ学）メーリングリストという、タランチュラ飼育者用と世界のクモ学者用の英文MLに加入していました。HPも、英文ではタランチュラに関するものが、まあ100近くはあろうかと思われませんが、日本人

は見あたらず、日本ではタランチュラを飼っている人もほとんどいないだろう、と思っていた矢先でした。英文ページからのリンクで、ついに、タランチュラ飼育に関するHP（東京の方による）を見つけたのです。

これが、出会いとなって、日本のタランチュラ・ペットキーパーが出入りするチャット・伝言板のページ(Keeper's Net)もあることを知り、アメリカからのタランチュラ注文輸入なども、e-mail を通して共同購入のかたちで実現しました。伝言板に記入する話題がスゴイ量になってきたので、この際、自分のHPを持ちたいな、と思って、ジオシティーズで無料HPを開き、HTML 文書の平うちから始めました。今年の年末休みのことでした。

インターネットの効用は、距離と国境を超えるところにあるので、日本と香港、さらに英語を読む人々ともつなぐため、日・英語バイリンガルのページとしました。ジオシティーズがトラブルでデータ消去されたときは、焦りましたが、幸いバックアップをとってあって、復旧できました。

質問(3) 更新の頻度は？

答え「週に1,2回でしょうか。始めたところですから。掲示板への返事は書きこむようにしています。相互リンクも募集しているので、適宜、増やしていってます。クモに関する様々なページへのリンクや、画像の拝借もしているので、メンテナンスは結構手間を要します。仕事から帰って、夜中じゅうコンピュータに向かっていて、という日もしばしばで、家族には少しにらまれています。クモの世話に要する時間に加えて、ですからね。

質問(4) 読者(ユーザー)からの反響は？

答え「ページを読み進んでクモの写真に突き当たり、ぞっとして逃げてしまった方からは感想のメールはきませんから、いまのところ、良い反響ばかり、と勝手に悦に入っています(気分を害された方、この場を借りて？お詫びときます。)

一番うれしかったのは、日本よりさらにタランチュラ飼育ブームの遅れている香港で(なんせ2,3件しかその種のペットショップないんですから)、同好の士に巡り合うきっかけになったこと(香港タランチュラ・クラブも準備中)。最近では、結構危険なタランチュラの種を飼っているという女子中学生や小学生からまで、問い合わせのメールが来て、うれしい限りです。

情報不足の日本や香港のタランチュラキーパーには、海外のページへのリンクや、翻訳情報の提供を、重宝がられています。

(クモに特段興味のない)一般の人がどんな感想をもったかは、私としても興味津々ですが、「今まで考えたこともなかったけど、結構面白いかも」といったコメントがときどきあります。動物ペット関連でないページからリンクをはってくださったのは、「演劇・土蜘蛛」の話題に興味を持ってくださった「演劇集団・前進座」さんです。

質問(5) 蜘蛛(特に、タランチュラ<毒蜘蛛>の魅力とは？

答え「よく「毒蜘蛛」っていいですけどね、これは人間を狙った毒じゃないんですよ。小さなねずみとか蛇とか、タランチュラを野生で見つけて食べてやろうとする連中に対して「防御」のために毒性のある液を牙から出すってわけです。それに、大半のクモは強い毒を持っていませんし、タランチュラに噛まれて死んだ人は歴史記録上、一人しかいません(それも直接の死因になったか、あやしい)。

セアカゴケグモは、タランチュラよりももっと毒が強いですが、日本の皆さんは気をつけてるから、今まで噛まれたって事故聞かないですよ。毒性の強いクモとの共存は可能ってことです。彼女らにいたずらに手を出したり、けしかけたりしなければ。熱帯魚ピラニアの水槽に手を突っ込まないのと同じこと。

さて、クモは節足動物(他にエビ・昆虫・サソリなど)の一種で、様々な環境に適応して、様々な生態(生き様)に発展した動物です。世界に三万種くらいいると言われてます。多様な形、生態は、魅力の一つです。「クモと一口にいてもねえ、色々あるんよ」というのが、私の口上のはじまりです。(詳しくは「驚くべき事実」のページをご参照)

タランチュラは、世界の熱帯・亜熱帯に八百種ほどいて、比較的大型の原始的特徴をのこすクモの一群です。この十年くらいの間に急速に、色んな種が、ペットとして米国・ヨーロッパで広がり始めました。場所を取らず、世話がラクなこと(餌を2,3週やらなくても平気)、悪臭のないこと、静かなこと(餌になるコオロギはうるさいけど)なども、ペットとしてのポイントでしょう。そのデザインも、シックな茶色、黒から、オレンジ、メタリックな青、「黄色・黒」の縞、などなど実に多様です。

普段のノンビリした様と打って変わり、コオロギを捕まえる際に見せる俊足、小さな「猛獣」という感じの牙使いは、あんのんとした私たちニンゲンを、ワイルドな生物界の「現実」に引き戻してくれます。ペットといっても野生動物なのだ、という自然界への畏怖を教えられる瞬間です。

最も感動的なのは、脱皮の過程です。クモは外骨格といってエビと同様、体の外側が固い殻でできているので、その殻を脱ぎ捨てて、新しいからだから出てきます。分身の術をゆっくり見ているようなその光景は、何度見ても感動的です。脱皮したてのタランチュラは、あらたな毛がベルベットの様に輝いて、とても美しいものです。

質問(6) なぜ蜘蛛に引かれるようになったのか？ 蜘蛛との出会いは？

答え「私はクモに関しては特異な生育歴をもっているようで、ものごころついたときには、クモを特段好むようになっていました。ムシ一般というのではなく、特にクモでした。巣をはってムシを取ることは幼い私の感動を呼びましたが、ウロウロ歩き回るクモにも引かれました。林を歩くときは、注意してクモの巣を壊さぬように気をつけたものです。巣を見つけると何十分も観察したりしました。

大学で、生物学を専攻して、いろいろな動物を研究する中で、クモの知識もさらに加え

ました。どうして他人はクモを嫌う（そしてクモの好きな私を奇異な目で見ると）のか、という疑問から、世界のいろいろな文化や風俗のなかでクモがどんな役割をしているのかも調べはじめました。日本では、古代の中央政権への抵抗勢力が「土蜘蛛」と呼ばれていたことも知り、権威に反発する傾向のある私は、ますます蜘蛛のカタをもつようになりました。驚いたことに、蜘蛛に対する尊敬の念は、アメリカ先住民と、西アフリカの民族の神話に、全然別個に平行して現れています。蜘蛛に引かれるのは、ニンゲンの原初的な「血」なんですよ、きっと。（詳しくは、「土蜘蛛」のページおよび「神話・物語」のページを参照）

質問（7）現在、飼っている蜘蛛の数と種類

答え「タランチュラ飼育に手を出し始めたのは、5年ほど前ですが、値段が下がった最近、種類を増やしはじめました。アメリカからの個人輸入、日本・香港のペットショップで買ったもの、タイ現地から持ち帰ったもの、香港原産の野生種まで含めて、30頭程ですが、一部屋の隅にケースを全部積みかさねてありますので、「家じゅうクモだらけ」ってわけはありません。

原産地でだまかに性格が分かりますが、南米産のものは主にバード・イーターと総称し、比較のおとなしい種が大半です。「メキシカン・ブロンド」はお気に入りの一つで、手に載せても大丈夫な、おとなしい金色のフワフワの毛で被われた美女です（米国ではマリリン・モンローのようなクモと呼ばれる）。

アフリカ産は、地面に網を張り巡らし、派手な威嚇姿勢を取る、バブーン・スパイダーと総称されるものが主流です。背中に神秘的なユニコーンのような角の生えた「ホード・バブーン」は、手当たりしだい何でも食いまくる大食漢です。

アジア産は、いちばんよく知られていないのですが、インド・スリランカ原産のオーナメンタル・ツリースパイダーの一属は、じつにカラフルなのがが多く、値段も張りますが、魅力的です。樹上性なので、ケースのアレンジを工夫します。スリムな脚の色が、メタリックブルー・黄色・黒・白の四色という、俊足の超美種がうちにいます。数年後には30センチくらいになるとのうわさです。

質問（8）毒蜘蛛を飼っているとのこと。噛まれたり、逃げ出したりされる心配はないのか？

答え「ニンゲンが噛まれる怖れのある種は限られています。毒性が怖れる程とされる種はもっと限られます。でも、噛まれたら痛いのは確かですし、あわててクモを床に落として殺してしまったりしたら、大変です。私のモットーは、「ペットを恐れではなく、尊敬をもって扱うこと」です。恐怖心は自信を失わせ、事故をまねくもとです。特定の種の性質をよく観察し、熟知し、その上で、ケースの開け閉めやクモの移動に必要な「注意点」を身につける様にしています。

ケースのふたを少し開けてピンセットを突っ込むとします。クモの反応は種によって色々です。穴の中に逃げ込むヤツ、向き直って前脚を振り上げ威嚇するヤツ、なかには、

ピンセットを駆け上がってこようとするのがあります。性質を熟知していれば、逃げ出した
り噛まれたりする危険はほとんどありません。イヌ・ネコの事故より少ないはずで

ケースの不備から逃げられた経験が二度ほどありますが、部屋中探して見つけ出しまし
た。いずれもおとなしい種類でした。危険な種類のケースは万一倒れてもフタが開かない
ように針金で固定するなどしています。

質問(9) 蜘蛛に関する、何か面白いエピソードがあれば、教えてください。

答え「クモのエピソードは、語りだしたら一晩でも終わりません(君はそういう奴だと私
の友人たちは言っています)。そこで、HPのエピソードを一つ、二つ。

某雑誌社が私のページを写真入りで取り上げようとしたところ、クモの写真を掲載した
ときの読者の反応を考えるべきだということになり、編集会議で「写真なしの扱いにしろ」
と決まったそうです。クモはかくも差別されているのです。そこで、本誌日経ゼロワン
のご英断に感謝。

英文のHPでは、「ウェブリング」というのが最近はやっていて、同テーマの個人HPが
同一のロゴを表示して、これをクリックすると、次々にリングのメンバーのページに飛ん
で順番に見て行ける、というシステムがあります。クモページのリングがつい最近登場し
たので、さっそく登録、友人の日本語クモページも登録して欲しいと頼みました。ところ
が、英国人のリング主催者は、「英文が主でないページは参加させない」というのです。せ
っかく、インターネットが国境を越える可能性を持つのに、言葉が壁になるなんて。タラン
チュラのページなんて、たいがい写真がメインですから、日本のネットサーファーも英語
ページの写真だけ見て楽しんでるのに、日本語ページ締め出し、なんて不公平ですよ。ね。
日本でのタランチュラ事情は、アメリカ・ヨーロッパに比べ、「情報不足、値段が高い」と
不利なので、HPが情報公開の突破口になれば、と願っているんですが。

クモそのもののエピソードの圧巻は、私のHP「アジア奇談」ページを見てください。
クモを食べさせられる話があります。

質問(10) 今後のページ展開について、新企画をスタートさせる予定や現在の内容を変
更する予定があれば教えてください。

答え「まだ、自分でとってアップした写真が少ないので、我が家のクモの素顔をもっと多
くアップするつもりです(デジカメもスキャナーもないのがイタイ)。さらに多くの人との
接点を持つためには、「アラクノフォビア(クモ嫌い)は、心理学的、文化的にどのように
して生じるのか」を論じるのが課題だと思ってます。嫌いな人のアンケートなんかも取っ
てみたら面白そう。

質問(11) プロフィール(生まれた年、出身地、職歴、趣味、インターネット歴など、公
表しても差し支えない程度で結構です。)

答え「インターネット上では身分を公開しないことにしています。年齢，出身地，職業のどれをいっても，趣味がタランチュラということで，「ああ，あの人だ」って身近な人たちに特定されてしまいますので。

以上です。なお，質問タイトルに「毒蜘蛛」というのがありますが，もしQ & A形式でまとめるのであれば，そちらの表現として使っていただいても，回答部分で指摘しているのでかまいませんが，私個人はこの表現を避けるようにしています。タランチュラ＝毒蜘蛛というのは，誤りなので，ここに記した程度の解説無しに誌面に出すことはさけて欲しいと思います。目次なんかも同様。（例えば，毒蜘蛛のページ出現！なんてのは，イメージが誤解のまま定着しますから，困ります。）私はクモ嫌いの人の表現の自由は尊重しますが，事実を歪曲する誇大表現には反対します。

<ウェブ「クモニスト・インターナショナル」にアップされた内容を転載しました（池田）2014年6月>